

最優秀賞(学生部門) 中野 真浩

## 臨床工学技士との 出会で気づいたこと

私は臨床工学技士を目指す学生です。長い間病気を患い、現在も闘病しています。この病気の治療は直接臨床工学技士と関わりはありませんが、病院のスタッフのおかげで快復の方向に向かっているので、私も将来は医療関係の仕事に就きたいと考えるようになりました。人と接することが苦手な自分の性格にあったものを考えると医療機器を扱う臨床工学技士がいいと思いました。その時はまだ、単なる機械を扱う仕事だというイメージしかありませんでした。

そのような私が、大学に入学して2年次に進級し、ある臨床工学技士(教員)と出会いました。これまでに病院やメーカーでの勤務を経験し、様々な側面から患者さんを見てきた技士でした。この先生の講義や日ごろの話の中心にはいつも「患者さん」がいて、こころに温もりのあるひとになること

が医療従事者への一歩だということを教わりました。人と関わりたくないと思っていた私は、思い描いていた臨床工学技士のイメージとはかけ離れていることに気づき、この道を諦めようと考えました。その時、このような話がありました。「私たちが取り扱う医療機器は単なる機械のように感じる時があるかもしれないが、その向こう側には必ず幸せを願う患者さんとその家族がいるんだよ。それは自分の大切な友人かもしれないし、最愛の人かもしれない。医療に従事したいという思いだけで機器を取り扱うのではなく、こころの温もりをもって安心、安全を届けることが私たちの使命なんだよ。」私はこの話を聞いたときに、自分の心に温もりが足りないことに気づきました。苦手な人付き合いを克服したいと思うようになりました。そして、臨床工学技士になりたいと真に思うようになりました。

この春から私は3年次に進級します。知識だけでなく、ひとつひとつの話から学び、こころに温もりのある臨床工学技士を私は今日指しています。

